

仙台高専生の

防災拠点づくり 住民の議論支援

山形・遊佐

災害に強い地域拠点づくりを考えるワークショップが20日、山形県遊佐町吹浦地区の吹浦まちづくりセンターであった。



東日本大震災の被災者を
含む仙台高専名取キャンパス（名取市）の学生らが司会・調整役を務め、地区住民ら46人と一緒に意見を話し合った。

吹浦まちづくりセンターは2014年度改築予定で、鉄筋3階、延べ床面積1200平方メートルの建物を新築する。施設は「津波避難ビル」の機能も兼ねる。遊佐町は地域住民の意見集約を仙台高専に委託している。

合った。

仙台高専生6人と東北公益文科大の学生2人が各班の司会役となり、「2階の津波が来たら、ドアの上まで水が来るかもしれない」などと助言した。住民からは「避難用に屋上はあった方がいい」「防災センター用の部屋を大きく取って、ふだんは会議室として使おう」といった意見が出た。

今後、同様のワークショップを繰り返し、本年度末までに、建物の配置や間取り、活用法などについて住民意見をまとめる。

河北新報 2012. 9. 30



南から



前に「地域をどう良くしていくか考え実行するのは住民自身」との考えがあるとも付け加える。

山形県遊佐町の吹浦地区で来年度実施を目標に、地域コミュニティセンター改築事業が進んでいる。町で初めて公募型ワークショップで設計する予定で、

山形街づくり 住民が主役

地域の声を設計に生かすため住民参加のワークショップ(WS)が行われている。

先月29日に現センターであった第1回WSは46人が参加し、5班に分かれ討論した。現施設の利点と欠点を付箋に書いて張り出したり、L字型や長方形など異なる形の施設模型をモデル

WSの企画・運営は仙台高専名取キャンパス(名取市)の教官や学生が担い、東北公益文科大(酒田市)の学生も協力する。WSの意義について仙台高専の小地沢将之准教授は「住民が主体的に施設の在り方を考えられることだ」と説明する。大

鶴岡市でも文化会館改築計画を住民参加型WSで策定中。市の担当者は「施設がある意味や街づくりにどう生かすかを、住民全体で考えてほしい」と話す。

今日28日は酒田市長選の投票日だ。新人2人が立候補し、それぞれが示す将来像のどちらかを私たちは選択する。ただ、新市長が決まればすぐに明る未来が実現されるわけではない。未来には私たち自身の参加と議論が不可欠であることを忘れてはならないだろう。

(酒田支局・樋口隆明)